

台湾における性的マイノリティ運動と宗教団体の関係

欧 陽 珊 珊*

Relationship between Sexual Minority Movements and Religious Groups in Taiwan

Shanshan OUYANG

This study examines the interactions between the Tongzhi community—a term referring to sexual minorities—and religious groups in Taiwan, with a particular focus on their influence on the LGBT movement. In Taiwan, where same-sex marriage has been legalized, the primary opposition to LGBT activism emerged from conservative Christian groups, despite Christians comprising less than 5% of the population. Although this countermovement ultimately failed, the interfaith alliances it fostered—demonstrating collaboration across religious boundaries—remain a significant aspect of the broader sociopolitical landscape. While certain religious groups actively oppose same-sex marriage, others adopt a neutral stance, and some even support Tongzhi individuals by providing spaces where both their sexual and religious identities are acknowledged and respected. Furthermore, based on interviews with minority group members, this research note underscores the importance of considering intersecting factors—such as disability, age, and ethnicity—when analyzing the relationship between religion and sexuality. By situating Taiwan's case within a broader regional framework, it advocates for further comparative research across Asia to examine how diverse religious contexts shape LGBT activism and the sociopolitical struggles of sexual minorities.

キーワード：性的マイノリティ運動、カウンター運動、宗教団体、LGBT、台湾

Keywords: LGBT movements, counter movements, religious groups, LGBT, Taiwan

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程

ouyangshanshan_koma@yahoo.co.jp

Received on 2024/11/19, accepted after peer reviews on 2025/5/27

I. はじめに

台湾では、2017年に司法院大法官が「同性婚を認めない現行民法の規定は違憲だ」とした解釈に従い、2019年5月17日に18歳以上の同性同士の婚姻関係を保障する特別法である「司法院釈字第748号解釈施行法」が可決され、同月24日から施行された。これにより台湾はアジアで初めて同性婚の合法化を実現した。この「歴史的な一歩」の達成までには、台湾の性的マイノリティとその支持者たちによる性的マイノリティの権利向上のための社会運動の長きに渡る闘いがあった。30年間の運動の中で、とりわけキリスト教の保守派¹団体 (conservative Christianity) が批判の声を上げ、反同性愛・同性婚運動を続けていたと指摘されている（黃, 2018）。

カウンター運動²に関しては、米国や英国、フランスでは白人社会を中心とするキリスト教の保守派組織による運動がよく取り上げられている（上坂, 2008；及川, 2006；Hunt, 2011）。アジアにおいても、韓国ではプロテstant保守が同性愛者の権利保障の制度化を妨害することに成功し、反同性愛運動の拠点として世界的に知られる教会も存在することが指摘されている（福永, 2021）。イスラム文化圏では、保守派イスラム勢力による反LGBT運動の台頭がある（大形, 2019）。これらの運動では、多数派信仰に属する宗教団体がカウンター運動の主力を担ったことが共通している。これに対して、台湾ではキリスト教や保守派イスラムの信仰はいずれも極少数派であり、多様な宗教信仰との関係性に注目する必要がある。加えて、台湾においては保守派によるカウンター運動の多くが失敗に終わったことから、このトピックに対する学術的関心は限定的である（Ho, 2020）。

そこで本稿では、これまで個別の宗教団体の活動や発言に関する事例として断片的に扱われてきた文献資料や新聞記事を再検討し、台湾における性的マイノリティのコミュニティと宗教団体の関係を俯瞰的に捉える。そのうえで、そうした関係性が社会運動にいかなる影響を及ぼしてきたのかを明らかにする。さらに、宗教信仰と性的マイノリティとの関係にとどまらず、他のマイノリティの交差的視点を導入することの重要性も指摘する。

II. 運動の流れ：同志（性的マイノリティ）コミュニティと宗教団体の闘い

まず、台湾の性的マイノリティ運動とそれに対するカウンター運動の全体的な流れを整理し、これらの運動に関する諸団体の関係を明らかにする。

台湾の性的マイノリティ運動が始まったのは1990年代の前半である。1987年に台湾で戒厳令が解除され、政治の自由化を迎えるとともに、フェミニズムの影響を受けて女性運動が展開した。1990年初頭にはレズビアン団体をはじめ、ゲイ団体、学校内のサークル、クィア研究会など草の根運動のコミュニティが誕生した。しかし、当時の台湾社会は、同性愛者への偏見が強かった。同性愛者は「変態」や「精神病理」、宗教の教えによっては「罪」であり「前世の罰を受けた人」として見られ、ステigmaを付与されていた。その頃から、社会運動のコミュニティは「同志運動」と呼ばれ、異性愛中心主義の社会からステigma化された「同性愛者」という言葉の代わりに、「同志（tongzhi）」という言葉が用いられた。その後、「同志」は台湾における文化圏、メディア、学

¹ 台湾の文脈でいう「保守」は、文化的なものであり、家父長制的価値観に挑戦し、アイデンティティの多様化を促す女性運動とジェンダー平等運動への反対によって特徴づけられている。

² 既存の別の運動の目標に特に反対する組織化されたキャンペーンを指すために使用している。

術研究などさまざまな分野で、広く社会において使われるようになった。簡家欣（1998）は、「同志」という言葉の使用が、社会から周縁化されていたマイノリティの、マジョリティへの対抗心を搔き立て、知識の再分配を促したと指摘している。

当時（1990年代の同志運動形成の初期）、宗教とのかかわりで論争の対象になっていたのが、主に同性愛である。郭承天（2010）は「保守的」なキリスト教と一貫道の信徒が、同性愛に対立する意識を最も強く持っていると指摘している。しかし、台湾ではキリスト教や一貫道の信徒は少数派であるため、賴鈺麟（2003）は性的マイノリティ運動の最大の「敵」は外来宗教であるキリスト教の右派ではなく、異性愛中心の伝統的な価値観と家父長制であると指摘している。

台湾における宗教の信仰状況をまとめた全国的な統計資料によれば、台湾では道教と仏教が主流を占めている。最新の「世界の宗教の自由に関する報告（2022年）」によると、台湾の総人口23.6万人のうち、約27.9%が伝統的な民間信仰、19.8%が仏教、18.7%が道教の信者であり、23.9%は無信仰である。残りの人口は、主にプロテスタント（5.5%）、一貫道（2.2%）、カトリック（1.4%）、その他に、ユダヤ教、イスラム教、天理教などを含む少数派宗教のメンバーで構成されていると推計される（The U.S. Department of State, 2023）。

反同性愛の宗教団体は社会的に大きな声を持たず、もっぱら同性愛者の信徒の除外を訴えることが中心だった。例えば、あるカトリック系の大学は、学生が同性愛者であることをカミングアウトすれば、退学処分の対象になると明言した（同光同志長老教會, 2016）。また、あるミッション系の大学では、学内で性的マイノリティを支援するサークル活動が禁止された（田村, 2017）。

90年代末、台湾最大の支援組織である「同志諮詢熱線協會（同志ホットライン協會）」が設立され、ほかにも多様な同志団体が活躍するようになった。1998年に「同志人権連盟」を中心に、性的少数者による選挙活動への参加運動も始まった。これらの運動の成果として、1998年の台北市長選挙の最中に国民党の馬英九は「同志人権宣言」に署名した。馬氏の着任後、台北市が資金を出し、民間団体と連携して「同頑節（同志フェスティバル）」を開催する計画が決まった。2003年からはその一環として、「臺灣同志遊行 Taiwan LGBT Pride（台湾 LGBT パレード）」が行われるようになった。当初、参加者は1000人だったが、毎年参加者は増え、近年では30万人を超えるアジアとして最大規模になった。ところが、このパレードはホモフォビックなバックラッシュを招くことになった。第1回パレードの後、「同志亡國論」や「AIDS 天罰説」が唱えられ、保守派宗教団体の福音派牧師らが署名を集め、「反 LGBT パレード」の声明を出すなどカウンター運動が起こった。

一方、「人権立国」という政策戦略の影響下で、性的マイノリティの権利擁護に関する法制度化が徐々にではあるが進められてきた（鈴木, 2022）。例えば、2004年には学校での性差別や性自認・性的指向による差別を禁止する法律「性別平等教育法（ジェンダー平等教育法）」が成立した。2008年に「性別就業平等法（ジェンダー就業平等法）」が改正され、性的指向による差別禁止が明文化された。2009年にはさまざまな領域の同志組織が連帯して「臺灣伴侶權益推動聯盟（台湾パートナーシップ権益推進連盟）」（以下「伴侶盟」）が設立された。2013年には、「伴侶盟」は婚姻平等化草案、パートナーシップ制度草案、親族制度草案という3つの「多様な家族形成に関する法案」を提出了。田村（2017: 24頁）は「連盟を中心とする市民団体の活動やプライドパレードによって、同性婚を支持する世論は急速に増加した」と指摘している。その後、「婚姻平權（婚姻平等の権利）」は同志運動の主要な目標になった。そして、2015年には高雄をはじめ全国の自治体がパートナーシップ登録を開始した。同志団体は2016年に25万人のデモを呼びかけ、同性婚を合法化す

る民法改正の支持を訴えた。当時、民進党の蔡英文候補は婚姻平等の権利の支持を表明した。

しかし、こうした動きは保守派宗教団体からの大きな反発も引き起こした。「伴侶盟」と対抗するため、2013年にキリスト教を中心に18の宗教団体が連携し「台湾宗教団体愛護家庭大連盟(Taiwan Religious Alliance to Protect Families)」(以下「護家盟」)という宗教組織を結成した。具体的な情報は公開されていないが、郭(2015: 9)によれば、その内訳はキリスト教新教9団体、カトリック教1団体、仏教2団体、儒教2団体、道教1団体、一貫道1団体、外来キリスト教新興宗派1団体、民間宗教2団体、不明信仰1団体である。また、宗教団体は固定的なメンバーを有し、定期的な集会を開催していることから、高い動員能力を持つと分析している(郭, 2015)。さらに、これらは同志団体と比べ、政財界とのより密接なネットワークを有していた。例えば、「護家盟」の諸メンバーは、国民党幹部、民進党の一部重要人物と面会し、婚姻平等法案への反対を促すようにしている」と「伴侶盟」の理事長である弁護士の許秀雯は述べている(Hsu, 2015: 159)。「護家盟」は反同性愛、反同性婚の宣教、反ジェンダー平等教育を主張する差別活動を行っている。2013年11月30日には10万人(資料によっては30万人とも言われている)を動員して總統府前で集会を行い、「多様な家族形成に関する法案」の民法改正に反対する運動を繰り広げた。その結果、「多様な家族形成に関する法案」はいずれも廃案になった。しかしデモ以降、「護家盟」内部における力関係が緊迫した状態になり、外来キリスト教新興宗派の勢力への疑問が噴出したり、構成員の一部は犯罪組織との関係を疑われたりした(郭, 2015)。他にも秘書長である張守一の不倫が発覚し、「護家盟」が主張する伝統的な婚姻を裏切る行為だと見なされ、一時期「護家盟」の社会的信用は低下した。

2016年の選挙に向け、国民党との連携に傾く「護家盟」の一部構成員は、台湾で初めての政治宗教団体となる「信心希望連盟」を立ち上げた。それに対抗して、「伴侶盟」は民進党と連携した。選挙は民進党が大勝し、同性婚に関する法制度化が進んだ。「伴侶盟」以外では、いくつかの影響力を持つ同志団体が、SNSを中心にオンライン・コミュニティを活用する「婚姻平權大平台」を立ち上げ、地方や原住民の居住地域で活動を企画し、民間宗教である媽祖信仰と連携する姿勢も示した。2017年、同志運動の活動家である祁家威は同性間の婚姻関係に関して憲法解釈を要請し、それに応じて司法院大法官は「第748号解釈で同性間に婚姻を成立させていない民法を憲法違反とし、2年以内に同性間の婚姻の自由を保障する法律が成立しなかった場合には、〔2019年〕5月24日から現行法にもとづいて同性間の婚姻を受け付ける」ことを命じた(鈴木, 2017)。

表1 2018国民投票 下一代幸福連盟から提案した項目

民法が規定する婚姻要件が一男女の結合に限定されるべきであることに同意するか否か。	賛成: 765万8008票 反対: 290万7429票
義務教育の段階(中学及び小学校)で、教育部及び各レベルの学校が児童・生徒に対して「性別平等教育法」施行細則が定めるLGBT教育を実施すべきではないことに同意するか否か。	賛成: 708万3379票 反対: 341万9624票
民法の婚姻に関する規定以外の方法で、同性カップルが永続的共同生活を営む権利を保障することに同意するか否か。	賛成: 640万1748票 反対: 407万2471票

中華民国(台湾)外交部(2018)より筆者作成

これに対して、翌年、民法改正を阻止するため、「下一代幸福連盟」(保守派キリスト教信徒を中心構成された組織、以下「幸福連盟」)は「国民投票」の仕組みを用いて、3つの反同性婚と反多元

性教育の項目を提出した。これらの項目は有権者の4分の1以上の賛成によって成立した（表1）。これらの国民投票の宣伝には膨大な資金が使われたが、その財源について鈴木（2022：129頁）は、国境を越えてキリスト教福音派から資金が流れたという説もあると指摘している。2019年に同性婚の合法化を実現したあとも、「幸福盟」は国民投票の結果に沿って「第748号解釈施行法」の廃止を要求する活動を行っていた³。

ここまで、台湾における性的マイノリティコミュニティと宗教団体の対立の全体的な流れを示してきた。性的マイノリティの当事者団体や支援団体は、権利保障のための法制化を求めて運動を展開し、婚姻の平等は最終的に立法機関による法制定という形で実現された。それに対するカウンター運動は、キリスト教の保守派団体を中心として組織されたが、他の宗教団体との連携も見られ、信者コミュニティの内部集団から国民投票など政治活動といった公的領域へとその影響を拡大した。結果として、同性婚の合法化に反対するカウンター運動は失敗に終わったものの、極少数派でありながら密接なネットワークを構築し、信仰を超えた宗教団体間の協力関係を築き、政教連携のもとで国民投票活動を展開することで、信者のみならず一般市民の動員にも成功した。このような動きは、今後も引き続き注視する必要がある。

III. 同志のための宗教団体：包摶と連帯はいかにして可能か

同性婚の合法化の実現は、同志コミュニティにとって大きな励みとなり、台湾社会におけるダイバーシティとインクルージョン（台湾では「多元融和」と呼ばれる）の推進を一步前進させた。一方で、カウンター運動によって影響を受けた同志たちが、精神的ダメージを感じる機会も増えている⁴。前述のとおり、カウンター運動は主に宗教団体を中心に展開された。しかし、台湾の宗教団体の多くは、同性愛や同性婚に関する課題について明確な立場を示さず、反対も賛成もしない中立的な姿勢を取っている。その一方で、数は限られるものの、同志を支持し、支援を表明する宗教団体も存在している。

台湾で初めて同性愛者を受け入れたキリスト教会は「同光同志長老教會（Tong-Kwang Light House Presbyterian Church）」（以下「同光教会」）であり、1996年5月に、同性愛者の信徒たちの困難に心を痛めた楊雅恵牧師が開設した。設立当初は、台湾の長老教会から相当な批判を受けた。その後任牧師となったのが、同性愛者であることをカムアウトしたうえで正式に握手礼（プロテスタント教会では教師の資格を与える儀式）を受けた曾恕敏牧師である。同光教会は、2000年にアジアで初めて、同性カップル間の「結び固め」という祝福の儀式を行った。2014年には香港出身の黃國堯牧師が後任になり、同性愛者だけではなく、多様な性的指向、性自認を持つ信徒を受け入れるようになった。さらに、2015年から集会場所を公開し、社会に対して積極的に「カミングアウト」する態度を取り、同志キリスト教信徒としてのアイデンティティを示しながら同志運動に参加した。

婚姻の権利平等を訴える運動を積極的に支持した同光教会は、同性婚の合法化が実現されたあと、新たな挑戦に向かっている。これまで同光教会は、宗教における性的倫理（例えば、1対1のいわ

³ 他の反同性愛と反同性婚を公的に表明している宗教団体は、キリスト教台湾信義会、エクソダス・インターナショナル台湾協会、真愛連盟（保守派キリスト教系大学を中心とした反ジェンダー平等教育の組織）である。

⁴ 報道によれば、「同光教会」の黃國堯牧師は、同性婚特別法案が台湾政府によって発表された際の保守派によるカウンター運動の結果、相談に来る人が増えたと述べた（福岡、2019）。

ゆる誠実なパートナーシップ関係など) に関しては信徒たちの自由に委ねていたが、モノガミーとしての婚姻関係を維持することを性的な倫理や規範として明示することは、同性婚の専法根拠である「第748号解釈施行法」と整合しないのではないかと考え始めた。一部の信徒にとっては、「同志」として性的解放や、多様な関係性の実践の精神に反すると感じられたものである。法律の精神と同志の精神の二項対立の中で、教会がより信仰へ向かうにはどうすればよいのか、大きな課題であるとされている(同光同志長老教會, 2019)。

同志運動の拡大によって、同性愛者であるキリスト教信徒にかかわる社会問題も可視化されるようになった。同光教会の成立をきっかけに、台湾ではキリスト教の最大の宗派である「台灣基督長老教會(台湾キリスト教プロテスタントの長老教会)」は同性愛についての研究グループを立ち上げて調査を行った。2004年の調査報告書では同性愛者の信徒の存在を肯定し、信徒たちが直面する困難を明らかにしている。2014年の「台灣基督長老教會同性婚姻議題牧函(Pastoral Letter)」では、性的指向としての同性愛は尊重することを強調する一方で、同性婚には反対するという立場を示した。それに対し、長老教会の内部組織である「長老教會青年陣線」と「同光教会」は、強い批判を行っている。現在「台灣基督長老教會」では同性婚に対して統一的な立場を示していない。

「同光教会」が誕生した半年後(1996年)には、「童梵精舍」の仏教徒の男性同性愛者を中心とした団体も設立された。「童梵精舍」は仏教の經典「妙法蓮華經觀世音菩薩・普門品」に沿って、「觀音菩薩は声を追いて、世間の苦を救う。觀音菩薩はどこにもいる」という、「一切衆生悉有仏性」の精神を信仰としている。「童梵精舍」の解釈によれば、觀音菩薩は、救いを求めるすべての人間をわけへだてなく救う。觀音菩薩による救済は、同性愛によって変わるものではないとした。許育典(2017: 92)は「同性愛は仏教信仰の核心価値である『一切衆生の平等』と反していない。差別を否定する仏教の教えは、同性愛に対する差別も否定する。しかし、一部の經典の解釈によれば、同性愛の修行者が僧侶になることに対する疑問もある」と指摘している。この疑問に対して「童梵精舍」は、信徒が異性愛か同性愛かを、わざわざ仏に告白しなくても修行はできると主張している。「童梵精舍」は、積極的に同志運動に参加した他の団体とは異なり、「同志」としての対抗路線も、当事者性も強調していない。信徒たちの社交する場として機能してきたことで、台湾仏教界において保守派との対立は弱まったとされている(楊, 2002)。一方、台湾仏教の四大教団(信徒は台湾人口の半分と言われている)である慈濟山、佛光山、法鼓山、中台山は、同志運動にいかなる立場も示していない。

台湾三大宗教の一つである道教は、漢民族の文化を基に、老子を教祖とし、修練を積むことで仙人になれる信じるものである。道教は多神教に属し、民間伝承や歴史上の人物との結びつきが強い。その經典に性的指向に関する直接の言及はないが、同性愛が「陰陽合一」の思想と合致し、自然に違反しないと解釈する道教信徒や法師は少なくない(許, 2017)。要するに、道教の教義は、同性愛をはっきりと否定するものではないと考えられる。しかし、「陰陽合一」に対する理解の違いによって、同性愛への信徒たちの態度も異なっている。台湾の道教からは、同志運動と直接的にかかわる特定の団体はまだ生まれていないが、2006年に道士である盧威明が、台湾の新北市の永和区に「威明堂」を設立した。この「威明堂」は同志の縁結びにご利益があると宣伝し、同志コミュニティの間ではとても人気があるようだ。ここでは、主流の道教では認められていない兎児神⁵を信仰

⁵ 「兎児神」の起源として、福建省に赴任した官吏に恋をした青年胡天宝の物語を伝えている。「胡は皇帝の代理人

し、道士は参拝者から恋愛や同志に関する悩み相談などを受け付けている。

台湾の主流社会において異性愛中心の価値観と家父長制が根深く残る中で、同志を支援する団体は当事者にとって一つの「居場所」となっている。しかし、多くの同志支援団体は、宗教信仰の問題には積極的に取り組んでいない。そのため、信仰を持つ同志にとって、セクシュアリティと宗教信仰の両方を尊重する場は限られている。こうした中、宗教的アイデンティティと性的アイデンティティの両方を等しく重要なと位置づける宗教団体は、宗教が社会規範からはずれる人々に対して差別や排除の根拠とされることに異議を唱え、信仰とセクシュアリティの両立を訴えている。また、当事者が自身のアイデンティティを肯定できる場を提供することで、宗教の視点から多様性の受容を広める役割も果たしている。これにより、信仰を持つ同志が安心して生きられる社会の実現を促進している。

V. 総括と展望：宗教信仰とセクシュアリティにとどまらない

以上、本稿では、これまで十分に関心が払われてこなかった台湾の性的マイノリティ運動と宗教団体の関係について整理してきた。同志（性的マイノリティ）の権利を保障する法制度の進展に伴い、少数派の信仰であるキリスト教の保守派団体が中心となったカウンター運動が展開され、信仰の枠を超えて複数の宗教団体が連携している経緯を明らかにした。このような対立構造の中で、同志運動に協調するような宗教団体の動きが起き、同志を支援する宗教団体も存在しており、その重要性が指摘できる。

台湾では、宗教団体が民間社会福祉の発展に大きく寄与してきたと指摘されている。中でも、基督長老教会は数多くの障害者や労働者の生活保障を支援する団体を傘下に持ち、台湾聖公会は老人介護の分野で一定の役割を果たしている（上村, 2016: 127-128 頁）。この環境の中、筆者の調査によると、「残酷児」⁶と自称する障害者である同志の一部は、教会と強く結びついた福祉施設の利用に不安を感じている。この不安は、独身の高齢同志のゲイ男性にも共通しており、かれらは老後に老人ホームへの入居を計画しているものの、自身の性的指向、同志のアイデンティティを隠さなければならないことへの苦悩を語っていた⁷。また、原住民族である同志（以下：原住民同志）も多重的マイノリティとして困難に直面している。現在、原住民族全体の約 70% がキリスト教信者であり、多くの教会は保守的で性的多様性について寛容ではないとされている（董, 2017）。原住民同志は、性的マイノリティであることで原住民族のコミュニティから排除される一方で、原住民族であることで主流の同志コミュニティに居場所がない状況に置かれている（瑪達拉, 2004; Ciwang et al., 2021）。

たる官吏がトイレに入ったところをのぞいたために、死刑を宣告された。そして死後、その愛の純粹さにほだされた神々によって赦しを受け、ウサギの神に姿を変えた。以後、この神は同性愛者の守護神となり、靈廟に祀られるようになった」と 18 世紀袁枚による小説『子不語』に記載されている。

⁶ 中国語圏では、「残」は完全なものに傷をつけるという意味で障害を表す。「残酷」は悲惨、むごいことを表す。「酷」は厳しい、または英語のクール、カッコイイという意味であることから、台湾では「酷児」が Queer の翻訳語として用いられてきた（欧陽, 2021: 61）。「残酷児」は、これらの 4 つの意味を踏まえて、肢体障害者であり男性同性愛を自認するアクティヴィストでもある Vincent により考え出された言葉である。「残酷児」の活動団体については、欧陽（2023）に詳しい。

⁷ 聞き取りは筆者が 2023 年 10 月 28 日～30 日に台北で行った。

このように、性的マイノリティと宗教信仰の問題を論じる際には、「異性愛と同性愛」という二項対立にとどまらず、高齢者、障害者、原住民族といった交差性の視点が不可欠であり、宗教信仰と性的マイノリティの「共生」に向けては、多様な社会的属性が交差する複雑な現実に目を向ける必要がある。

日本でも一部のキリスト教系の教会や神道団体、旧統一教会などが「反 LGBT 活動」を展開している。例えば、クィア・スタディーズの研究者で牧師の堀江有里（2006）は、日本基督教団における「同性愛者差別事件」⁸や教団内のジェンダー差別問題を論じている。また、旧統一教会系メディアの『世界日報』は、パートナーシップ制度や LGBT の権利保障に関連する条例・法案への批判を継続的に発信しており、神社本庁の政治部門である神道政治連盟も反 LGBT 言説を擁護している状況がある（山口・斎藤, 2023）。性的マイノリティの若者支援を行う遠藤まめた（2022a; 2022b）は、こうした反 LGBT の行動によって当事者が受けたダメージや、活動現場で旧統一教会による反対工作を目にした経験を紹介している。このような反 LGBT 活動の影響や動向を分析するうえで、台湾の事例は重要な参照点になるだろう。今後、アジア諸国を視野に入れ、宗教団体による性的マイノリティ運動への動員とその社会的影響について、より体系的な比較分析が求められる。

参考文献

《和文》

- 遠藤まめた（2022a）「まめたの虹色時評：統一教会が繰り広げてきた反 LGBT 運動」2022年7月23日付『論座』朝日新聞, <https://webronza.asahi.com/national/articles/2022072200004.html> (2024年3月24日閲覧).
- （2022b）「まめたの虹色時評：差別冊子をきっかけに考える神社と LGBTQ の現在地」2022年11月11日付『論座』朝日新聞, <https://webronza.asahi.com/national/articles/2022111100004.html> (2024年3月24日閲覧).
- 及川健二（2006）『ゲイ@パリ：現代フランス同性愛事情』長崎出版.
- 欧阳珊瑚（2021）「障害とセクシュアリティの交差についての考察：台湾の肢体障害／男性同性愛者の経験から」『コア・エシックス』17号, 51-63頁.
- （2023）「『残酷児』：台湾における障害のある性的少数者の実践」菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著『クィア・スタディーズをひらく3』晃洋書房, 108-135頁.
- 大形里美（2019）「インドネシアにおける LGBT 運動を取り巻く状況：LGBT 運動の展開と近年の対立の構図」『九州国際大学国際・経済論集』3号, 47-78頁.
- 上村明（2016）「台湾における市民社会活動と宗教および障害者福祉との関連性について」『立命館経済学』64卷4号, 474-492頁.
- 上坂昇（2008）『神の国アメリカの論理：宗教右派によるイスラエル支援、中絶・同性結婚の否認』明石書店.
- 鈴木賢（2017）「台湾における性的マイノリティ『制度化』の進展と展望」『比較法研究』78号, 236-246頁.
- （2022）『台湾同性婚法の誕生：アジア LGBTQ + 燈台への歴程』日本評論社.
- 田村慶子（2017）「台湾とシンガポールにみる性的マイノリティの人権と市民社会」『アジア女性研究』26号, 19-35頁.
- 中華民国（台湾）外交部（2018）「10項目の公民投票、7項目が成立要件に達する」2018年11月26日付 TAIWAN TODAY, <https://00m.in/mhKHI> (2019年9月14日閲覧).

⁸ 1998年、日本基督教団の教師検定試験において、ゲイであることを公表した男性に対し、常議員会にて「ホモセクシュアルなビヘイビアを持つ人が教師検定試験を受けると聞き及んでいるが、簡単に認めるべきではない」との発言があった。同年の総会では、同性愛者や「性の不一致」という表現でトランスジェンダーに言及し、これらの存在は「教師としてふさわしくない」とする文書が配布された。これを差別と捉えた人々が全国的な抗議運動を展開した。経緯と詳細については堀江（2006）を参照。

- 福岡静哉（2019）「街角から：神が愛する人々」2019年9月4日付『毎日新聞』東京朝刊国際面，7頁。
- 福永玄弥（2021）「『毀家・廃婚』から『婚姻平等』へ：台湾における同性婚の法制化と『良き市民』の政治」『ソシオロゴス』45号，39-58頁。
- 堀江有里（2006）『「レズビアン」という生き方：キリスト教の異性愛主義を問う』新教出版社。
- 山口智美・齊藤正美（2023）『宗教右派とフェミニズム』ボリタスTV編，青弓社。

《中文》

- Ciwang Teyra・黃炤愷・謝宛蓉（2021）「只想好好地生活：原住民同志之交織處境與因應策略」『臺大社會工作學刊』43号，1-54頁。
- 董晨皓（2017）「『姊妹』在北排灣族長老教會處境之民族誌研究」國立高雄師範大學性別教育研究所碩士論文。
- 郭承天（2010）「臺灣宗教與政治保守主義」『臺灣宗教研究』9卷2号，5-26頁。
- （2015）「臺灣同性戀家庭權立法的政治心理學分析」『臺灣宗教研究』14卷2号，3-39頁。
- 許育典（2017）『同性婚姻、同性平權與宗教自由』台北：元照。
- 黃克先（2018）「全球化東方開打『文化戰爭』：台灣保守基督教如何現身公領域反對同志婚姻合法化」陳美華・王秀雲・黃于玲編『欲望性公民：同性親密公民權讀本』高雄：巨流圖書，229-248頁。
- 簡家欣（1998）「九〇年代台灣女同志的認同建構與運動集結：在刊物網絡上形成的女同志新社群」『台灣社會研究季刊』30号，63-115頁。
- 賴鈺麟（2003）「臺灣同志運動的機構化：以同志諮詢熱線為例」『女學學誌』15号，79-114頁。
- 瑪達拉・達努巴克（2004）「是原住民，也是同志：排灣男同志 Dakanow 的生命之歌」，國立高雄師範大學性別教育研究所碩士論文。
- 同光同志長老教會（2016）『聽你剪裁星空：傷痕與美好都構成了人生，同光教會20年』台北：基本書坊。
- （2019）「牧託之聲（2019. 07.）」牧師專欄，<https://tkchurch.org/2019/07/05/> 牧託之聲（2019-07-）/（2023年12月14日閲覽）。
- 楊惠南（2002）「童心梵行：台灣佛教徒同志平權運動」『當代』55号，30-51頁。

《英文》

- Ho, Ming-sho. 2020. The Religion-Based Conservative Countermovement in Taiwan: Origin, Tactics and Impacts. In Chiavacci, David, Simona Grano, and Julia Obinger, (eds.), *Civil Society and the State in Democratic East Asia*. Amsterdam: Amsterdam University Press, 141-165.
- Hsu, Victoria Hsiao-wen. 2015. Colors of Rainbow, Shades of Family: The Road to Marriage Equality and Democratization of Intimacy in Taiwan. *Georgetown Journal of International Affairs*, 16 (2), 154-164.
- Hunt, Stephen. 2011. A Turn to the Rights: UK Conservative Christian Lobby Groups and the 'Gay Debate'. *Religion & Human Rights*, 6 (3), 291-313.
- The U.S. Department of State. (2023 June 7). "2022 Report on International Religious Freedom: Taiwan." <https://www.state.gov/reports/2022-report-on-international-religious-freedom/taiwan> (accessed on March 20, 2024).